

## 研究ノート 中国都市インフォーマルセクターにおける地方出身者の就業構造 -- 北京市廃品回収業の事例を中心に

著者	山口 真美
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	44
号	12
ページ	28-56
発行年	2003-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00007734">http://hdl.handle.net/2344/00007734</a>

# 中国都市インフォーマルセクターにおける 地方出身者の就業構造

北京市廃品回収業の事例を中心に

やま ぐち ま み  
山 口 真 美

はじめに

参照枠組と課題  
北京市廃品回収業の沿革  
業種内の就業構造  
独占労働市場の形成要因  
むすび

## はじめに

本稿の課題は、中国の都市で就業する地方出身者の就業構造<sup>(注1)</sup>を実証的に明らかにし、中国における地方出身者の社会移動<sup>(注2)</sup>の可能性と限定性を議論することにある。

建国以来農村 都市間を分断してきた中国社会は、近年諸制度の緩和によって戸籍の枠を越えた人の移動が可能になってきたとされる。しかしその一方で、都市における地方出身者の就業空間、生活空間は依然として非常に狭い範囲に限定されているように見受けられる。つまり、都市郊外の住宅や農家にインフォーマルな形で居住し、就業機会は多くがインフォーマルセクターと総称される分野に限定されている。それにもかかわらず、インフォーマルセクター内の地方出身者の就業構造については、これまで一部を除き本格的な実証研究がなされてこなか

った。

そこで、本稿ではフィリピンのインフォーマルセクターの労働移動性を考察し、労働市場が分断化されていることを指摘した中西(1991)の議論を参照枠組とし、中国の地方出身労働者の都市における労働市場の構造を議論する。その際、廃品回収業というひとつの業種を取りあげ、就業者の就業歴と日常業務から業種内労働市場の構造を考察する。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第節において分析枠組と本稿の課題を整理した後、第節で北京市の廃品回収業の歴史の変遷を、特に経営権と就業者の変遷を中心に振り返り、業種内の分業構造を概観する。第節では、業種内就業者の実際の就業状況を、労働市場の独占につながる要因に着目しつつ見ていく。第節では、第節で見た歴史的制約要因と、第節で見た業種内就業者の日常業務のあり方から浮かび上がる、同郷出身者によって独占された労働市場としての廃品回収業の構図とその要因を議論する。合わせて、既存の「浙江村」研究との比較の視点から、中国の都市インフォーマルセクター研究として、本稿の議論が持つ普遍性を考えたい。むすびはまとめと今後の課題で

ある。

## 参照枠組と課題

### 1. 戸籍制度と地域間労働力移動

まず議論の前提として、地域間労働力移動の変遷を概観したい。中国においては、建国当初から厳格な戸籍制度による人口管理が行われた<sup>(注3)</sup>。その特徴は、農村と都市とを明確に区分し、農村から都市への人口移動を抑制するものであった点にある。これは、急速な工業化達成のため、食糧生産を担う農村人口を十分に確保し、同時に工業部門に就業する都市労働者の職を確保するための方策であったとされる。

政府は人民共和国建国後、戸籍管理制度の整備を進め、1958年に戸籍登記条例<sup>(注4)</sup>を公布した。これにより、農村戸籍者の都市への自由意志による移動は禁止される。農村戸籍者の地域間移動が緩和されるのは、1980年代半ば以降のことである。1984年には食糧を自弁する条件の下で、農村戸籍者の地方の中心町への移動と戸籍取得が認められた<sup>(注5)</sup>。また、翌85年には農村戸籍者の都市への戸籍移転を伴わない臨時的居住が認められるようになった<sup>(注6)</sup>。

しかしながら、一連の制度緩和にもかかわらず、地方出身者の都市における就業空間は今なお非常に限定されている。それは、都市住民の就業を優先的に確保しようとする都市の側の地方保護主義的政策によるものである。結果として、大都市において地方出身者が従事する職種・業種は伝統的なサービス産業と企業内での臨時的な職種を中心とした、都市住民が忌避する職業に限定されている〔孫 2001, 275〕。本稿では、これをインフォーマルセクター<sup>(注7)</sup>と総

称する。

ところで、北京、上海などの大都市では、インフォーマルセクターにあたるいくつかの業種が、特定の地方出身者によって独占される現象が一般的によく知られる<sup>(注8)</sup>。北京では、衣料品生産・販売業が浙江省温州地区出身者によって経営されていること、廃品回収業の就業者のほとんどが河南省出身であることがよく知られている。その他、東三環路沿いの眼鏡店の集積地である「眼鏡城」も温州地区出身者による経営であることで知られる〔北京零点調査公司 1997, 201-220〕。こうした同一地域出身者による都市の特定業種の独占という状況が存在することは、地方出身者の都市インフォーマルセクターにおける就業機会がそれだけ制約されたものであることを示唆すると考えられる。

### 2. 既往研究と本稿の課題

都市インフォーマルセクターにおける地方出身者の労働移動性を考察するためには、いくつかの業種に着目し、業種を超えた労働移動がどの程度実現しているのかを検討する必要がある。しかしながら、中国の都市インフォーマルセクターにおける地方出身者の就業実態に関する研究は未だ十分な蓄積がない<sup>(注9)</sup>。この領域における研究の中で、研究蓄積が多く、また最も注目されるのは、「浙江村」研究であろう。「浙江村」とは、北京市南部の郊外に自然発生的に形成された、浙江省温州市出身者の集住地帯の俗称である。衣料品の生産・販売を主要産業とし、住居を兼ねる小さな作業場で衣料品生産の家族経営による家内工業が営まれている<sup>(注10)</sup>。内部の社会関係は外部の者には閉じられた、凝集性の高いコミュニティである。

「浙江村」研究は興味深い内容を多く含むが、

労働力移動研究として見たとき、その普遍性には若干の疑問が残る。それは「浙江村」構成員の故郷である温州地区の特殊性によるものである。温州は、耕地が狭く、人口の多い農村地域であり、台湾海峡に面する地理的条件から、国家による投資をほとんど受けることがなかった。その反面、中国全土でも突出した手工業と商業の伝統が育ち、今日「温州モデル」と呼ばれる私営企業を中心とする地域発展モデル発祥の地となっている〔張・李 1990〕。現在、温州人は資金、技術その他の資源の点で中国の都市で就業する一般的な地方出身者の中でも極めて有利な条件を備えている。しかし他方で、中国の農村出身労働者の大部分は、低学歴で資金力も技術力も持たない層である〔原労働部農村労働力就業与流動研究課題組 1999, 126〕。

そこで本稿では、主な研究対象として北京市の廃品回収業を取り上げ、業種内外での就業者の就業歴と日常の業務内容から、業種内労働市場の独占を形成する要因を分析しようとする。廃品回収業を研究対象とした理由は主に以下の2点である。第1に、就業者にとって比較的参入障壁の低い業種だと考えられること。廃品の回収、売買には専門的な知識や技術を必要とせず、活動に必要な資金も比較的少ない、誰もが参入しやすい業種だと考えられる。それにもかかわらず、業種内労働市場の独占状態が形成される要因を探ることで、既存の「浙江村」研究との相違点、共通点を考察できるものと考えからである。第2に、労働力移動研究として、より普遍性を持つ業種であること。地方出身者の都市での就業あるいは集住地に着目した微視的な研究として、これまでは「浙江村」研究がほぼ唯一注目を集めて来た。廃品回収業就業者

は、一般的な出稼ぎ労働者像により近いと考えられる。

なお、北京の廃品回収業に関する、本稿に先立つ既存研究としては、唐・馮による「河南村」研究がある〔唐・馮 2000〕。唐・馮の研究は「河南村」<sup>(注11)</sup>と呼ばれる北京市外縁部の廃品回収業就業者の集積、集住地を取り上げ、河南人が業種内労働市場を独占するに至った過程と、業種内に出現した分業とそれによる業種内階層分化を議論したものである。この研究は、1980年代後半以降業種内に河南人が参入し、勢力を拡大してきた過程を詳細に説明したものであるが、河南人による廃品回収業の独占という構図は所与のものとされ、その原因は考察されていない。

### 3. 参照枠組

都市インフォーマルセクター内の労働移動性を考察する際に、フィリピンのスラムの労働市場の労働移動性を議論した中西の分析視角を参照したい<sup>(注12)</sup>〔中西 1991, 130-139〕。

中西は、開発経済学において伝統的に展開されてきた途上国のインフォーマルセクター理解の矛盾を指摘する。これらの理論において想定されるインフォーマルセクターの労働市場は、参入障壁が低く、競争によって賃金率が決定する完全競争原理の貫徹する場である。これが、フォーマルセクターへの労働力供給源となる。しかしながら、中西が観察したフィリピンのスラムに見られるインフォーマルセクターの労働市場はそれほど自由な参入が保証された場ではない。労働者の職歴分析によると、インフォーマルセクターからフォーマルセクターへの参入は極めて困難であることはもとより、インフォーマルセクター内部においても労働者は同質で

はなく、インフォーマルセクター内の労働市場を統合されたものとして見ることはできない。

中西は、インフォーマルセクター内の職種を生産性と参入障壁を基準に高生産性部門、低生産性部門に二分して考察する。インフォーマル低生産性部門が中でも最も参入障壁が低い部門と想定されるわけであるが、そこにおいてさえも一定の参入障壁が存在しており、それほど競争的な労働市場にはなっていないことが例証される。

中西の研究において、インフォーマル低生産性部門の中でも最も参入障壁が低く、典型的な職業として扱われたのが廃品回収人の労働市場であった。本稿における筆者の議論では、中国のインフォーマルセクターにおける全ての職業、業種に言及することはできない。そこで、廃品回収業という典型的な業種を取り上げ、この業種内の労働市場における就業者の就業構造と業種内外での労働移動性を考察する。考えられる仮説としては、北京の廃品回収業内労働市場においても、フィリピンと同様に出身地方による分断が見られ、そのことが業種内労働市場に非競争的な要素を生みだし、労働市場の分断につながっているというものである。

#### 4. マクロデータと調査の概要

インフォーマルセクターは一般的に、統計的に正確に捕捉することが困難な部門である。ここでは、本稿での議論の前提として1997年に実施された北京市の外来人口センサス<sup>(注13)</sup>データから廃品回収業に就業する地方出身者のマクロデータを把握しておきたい。

表1は北京市において廃品回収業に従事する地方出身者の出身地別人数である。なお、同センサスの対象となった地方出身者のうち廃品回

表1 北京市廃品回収業就業者の出身地別人数

戸籍所在地	人数(人)	比率(%)
河南省	8,938	51.2
河北省	3,730	21.4
安徽省	1,596	9.1
四川省	1,241	7.1
山東省	431	2.5
天津市	293	1.7
湖北省	222	1.3
湖南省	171	1.0
浙江省	169	1.0
黒龍江省	104	0.6
江蘇省	104	0.6
陝西省	86	0.5
内モンゴル自治区	75	0.4
山西省	64	0.4
遼寧省	43	0.2
江西省	37	0.2
吉林省	34	0.2
貴州省	31	0.2
甘肅省	21	0.1
福建省	17	0.1
広東省	10	0.1
重慶市	10	0.1
雲南省	8	0.0
広西チワン族自治区	3	0.0
青海省	3	0.0
上海市	1	0.0
海南省	1	0.0
チベット自治区	0	0.0
寧夏回族自治区	0	0.0
新疆ウイグル自治区	0	0.0
合計	17,443	100.0

(出所) 北京市外来人口普查弁公室(1998, 148)より筆者作成。

収業従事者は1万7443人であり、8万から10万人<sup>(注14)</sup>といわれる廃品回収業従事者総数の一部に過ぎないことには留意しなければならない<sup>(注15)</sup>。これによると、北京市の廃品回収業就

業者は、省別構成の偏りが非常に大きい。最も多くを占めるのは河南省出身者で51.2%、次に多い河北省出身者の21.4%と合計すれば両者で業種内就業者全体の7割以上を占める<sup>(注16)</sup>。なお、就業形態の区分では廃品回収業従事者の74.2%が自営労働者で最多であり、従業員を抱える私営雇い主と被雇用者が合わせて20.9%を占める〔北京市外来人口普查弁公室 1998, 156〕以上から、廃品回収業は、自営と数人の労働者を雇う私営業者による就業が中心であり、出身省別に見ると就業者は河南省、河北省に大きく偏っていることがわかる。

廃品回収業の業種内労働市場の概況を以上のように把握した上で、筆者によるフィールド調査のデータを質的なデータとして扱い、業種内労働市場の就業構造を明らかにしたい。なお、本稿のもととなる調査は、2001年3月から8月にかけての約6カ月間、北京市外縁部の望京と呼ばれる一帯を中心に筆者が実施したフィールドワークである<sup>(注17)</sup>。調査地は北京市の環状道路、四環路外に位置し、新旧の住宅地と若干の農地が共存する、都市周縁部の典型的な新興開発地域である。廃品回収業に関する調査を行うにあたっては、標準的な地域だと考えられる。なぜなら、こうした地域は廃品回収業就業者のほとんどを占める地方出身者が多く住む一帯であり、一方で市政府によって廃品集積場の立地が認められている<sup>(注18)</sup>からである。なお、インタビューの方法であるが、筆者はまず、一人の廃品回収人<sup>(注19)</sup>と親しくなり、廃品回収に同行して参与観察を行った。この間に廃品回収人の日常業務および業種内の関連事項を把握した上で2つの主要な観察地点を選んだ。後述するA 廃品集積場と、数グループの廃品回収人が

集まる建設現場前の路上である。本稿でインタビューを行っているインフォーマントは、この2つの観察地点で調査期間中に筆者が出会った廃品回収業関係者である。

## 北京市廃品回収業の沿革

本節では、本稿の分析対象となる北京市の廃品回収業の形成と変遷を概観したい。計画経済体制下での政府による独占経営から、今日の河南人による個人経営の圧倒的優勢に至る過程を、経営権と業種内就業者に注目しつつ振り返る(表2参照)。

### 1. 経営権

建国直後の中国において廃品廃材は、国家建設の原料として重視され、廃品回収業は政府が経営した。具体的な経営主体は2つの部門にあった。すなわち、生活廃品全般の回収を所管する供銷合作社<sup>(注20)</sup>、金属廃材の回収を所管する物資部<sup>(注21)</sup>である。このうち、本稿の対象となるのは主に生活廃品であり、供銷合作社の所管下とされてきた分野であるので、これを中心に見ていくこととする。

計画経済導入以前の中国において、廃品の売買は小規模な個人商人や行商人によって行われていた〔中国供銷合作總社史料叢書編集室 1988, 405〕。政府が本格的に廃品回収事業に着手したのは、第1次5カ年計画期(1953~57年)以降である。廃品回収業務を所管することとなった供銷合作社は、北京市廃品回収公司として北京市内の各地に国営の廃品集積場を設け、それまで廃品回収に携わっていた個人商人を供銷社内にも吸収する形で徐々に業務を掌握した<sup>(注22)</sup>。なお、1983年の供銷合作社体制改革で供銷合作社

表2 北京市の廃品回収業をめぐる主管部門と経営、就業者

時期区分	主管部門	経営者 / 就業者 廃品集積場経営者	廃品仲買	廃品回収
計画経済以前 ( ~ 1952年)	なし	大規模個人商人 ↓		行商人 ↓
第1次5カ年計画期 (1953 ~ 57年)	供銷合作社	供銷社と大規模 商人の共同経営 ↓		「合作商店」 「合作小組」 ↓
大躍進期 (1958 ~ 60年)	供銷合作社	集団所有制企業 ↓	企業従業員	企業従業員 ↓
調整政策期 (1961 ~ 65年)	供銷合作社			「合作商店」 「合作小組」 ↓
文革期 (1966 ~ 76年)	供銷合作社	国有企業化 ↓	企業従業員	
改革開放期	供銷合作社 1983年改革	集団所有制企業 個人経営者	地方出身者	地方出身者

(出所) 中国供銷合作總社史料叢書編集室(1988, 405-408)より筆者作成。

(注) 矢印は同じ主体の組織的変遷, 印は新規参入主体を表わす。

はそれまでの全民所有制から集団所有制とされ、さらに民営化が図られた。それに伴い、廃品回収業務も集団所有制企業による経営となった。同時に、廃品回収チャネルの多元化が図られ、個人営業者の廃品回収業への従事が再び認められるようになっている〔商業部・公安部・国家工商行政管理局 1985〕。

ただ、金属廃材の回収には別に経営権が限定されていることに注意しなければならない。1963年の行政法規で、金属廃材の回収に従事する機関が指示された〔国务院 1963〕。1980年代半ばから後期は、地方出身者が北京など大都市への出稼ぎに出始めた時期にあたる。北京市の廃品回収業においても、それまで集団所有制企業の従

業員が従事していた業務を地方出身者がとって代わるようになった。当時、北京人である従業員は廃品回収業務を嫌い、人員不足が深刻化していた。そのため、かつては集団企業、国有企業形で政府が運営してきた廃品集積場も、用地全体をいくつかの区画にわけて自営業者にリースするようになった。現状では、区画を賃貸する自営業者はほとんどが地方出身者であり、家族経営で廃品の仲買業務に従事している<sup>(注23)</sup>。なお、個人経営の廃品集積場の場合も、場内を小区画に分け、区画単位で個人経営者にリースする方式は同様である。

集積場に廃品を運び、仲買人に売却する廃品回収人も、以前は集団所有制企業の職員であった

が、現在ではほとんど地方出身者である。

## 2. 河南人による独占労働市場の形成

現在北京では、廃品回収といえば河南人という連想が人々の間で定着している。この「河南人」とは、実際には河南省信陽地区の固始県というひとつの県の出身者がほとんどである。本稿中では、簡単化のためにこれを河南人と記述する。

廃品回収業というひとつの業種に、特定地域出身者の就業が集中するのはなぜだろうか。

河南省固始県は、河南省南部の信陽地区に位置する農村地域で、非農業収入が少ないことから県外への出稼ぎ労働者を多く供出している。2001年人口センサスによる全県人口は159万人、うち36万人が県外で就業する<sup>(注24)</sup>。中国中部の典型的出稼ぎ労働者送り出し地域と見ることができる。なお、この地域には廃品回収業と関連する産業や伝統的要素は特に見あたらない。

北京市の廃品回収業に地方出身者が参入し始めた初期には、業種内分業の中で河北人が優勢を占めていた。唐燦、馮小双の先行研究によれば、1980年代後期の北京市の廃品回収労働市場には、「河北人は廃品仲買人、河南人は廃品回収」という分業体制が成り立っていた[唐・馮 2000, 80]。それが、1993年から2年ほどの間に河南人の優勢へと急変した。先行研究では、1993～95年の経済が好景気になり、廃品の価格が日々高騰したこの時期に、それまで河北人によって独占されていた仲買人のポストに、河南人が次々に取って代わった様子が描写される。先行研究では、インフォーマントの河南人の言葉を引いて「河南村」内の仲買人が、1980年代後半においてはほとんど河北人であったが、95年末には河北人は15～20%を残すのみになり、

多くが河南人にとって代わられたといわれる[唐・馮 2000, 80]。

1993, 94年の2年間は、92年の鄧小平による南巡講話を受けて中国国内の景気が過熱した時期である。各地で投資ブームが起き、建築資材を中心とした物資の需要拡大と物資不足、インフレが顕著であった。廃品として回収される廃棄物の中には、屑鉄、アルミ製品、銅製品など、建築、工業資材として再利用可能なものも多く、この時期廃品回収業は景気過熱の影響を直接に受けたと考えることができる。この時期に、それまで河北人の下で金儲けの機会を狙っていた河南人は廃品価格の高騰、廃品の供給不足を利用して各地の工場と取引を始め、力をつけたものと考えられる。業種内労働市場の河南人による独占状態は、この時期に形成された。しかしこの後は、業種内で当時のような価格の高騰は見られず、河南人による市場の独占状態は当時からほぼ安定していると考えられる。

## 3. 業種内分業

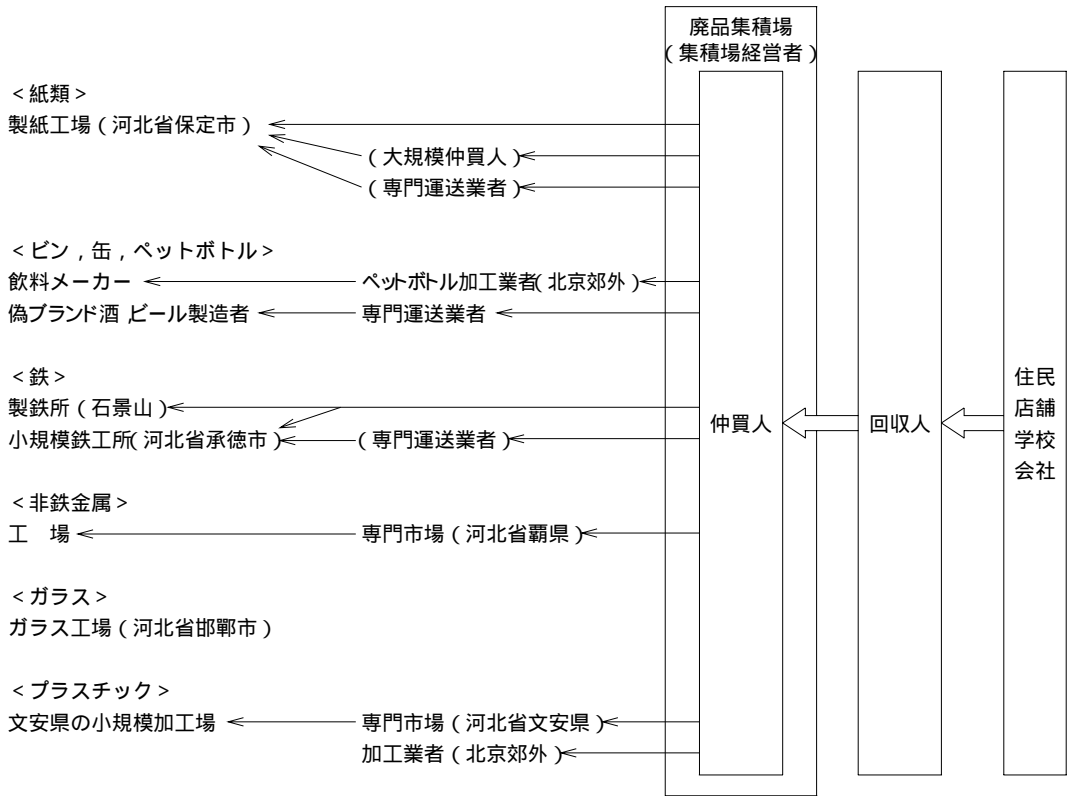
住民や店舗などの廃品発生源から、廃品がたどる経路は以下のようなものである(図1)。廃品回収業の分業体制は、廃品集積場経営者、廃品仲買人、廃品回収人の3者からなる。

### (1) 廃品集積場経営者

集積場経営者の役割は、用地とインフラの確保、政府関係部門からの営業許可の取得、納税義務の履行などの外部環境を整えることである。現在の経営主体には、旧来の北京市廃品回収会社の流れを汲む集団企業と1980年代以降許可された個人経営者とがある。前者を公営集積場、後者を個人営集積場とすると、公営集積場はどこも比較的大規模で、仲買人に貸し出される区画数は50～百数十程度である。設備、管理があ



図1 廃品の流れ



(出所) 北京市各種行政通知および筆者ヒアリングより作成。

(注) ガラス, ゴム, 木材の流通経路については, はっきりとした情報を得られなかったため, 記載していない。

る程度充実し, 安全性と合法性が保証される反面, 区画賃貸料も月3000~4000元と割高である。個人営の集積場は公営に比べ規模が小さく, 区画数は多いところでも20~30区画である。合法性と安全性, 設備などはまちまちで, 賃貸料も月額1000元ほどから存在する。

個人営の集積場を合法的に営むには, 企業登記を行って北京市の工商行政管理局から企業法人営業許可証(「企業法人営業執照」と「税務登記証」を取得しなければならない。企業法人営業許可証の取得には法人名義が必要とされている。経営者はほぼ例外なく北京人である。し

かし, こうした行政的手続きを行う北京人経営者の他に, 個人営集積場では河南人責任者がいて, 集積場内の実質的な管理を請け負っている<sup>(注25)</sup>。両者の間では, 賃貸料の分配について合意がなされている。

個人営の集積場には, 上述のような合法的手続きを得ていないところも存在する。また, 上述した金属廃材の経営に関する許可は公営集積場にしか認められていないが, 多くの個人営集積場が密かに金属廃材も扱っている。そうした集積場は, 公安, 工商管理局などの関係部門の取り締まりの対象になる。

(2) 廃品仲買人

廃品仲買人は、集積場内の区画を賃貸し、特定の品目に特化して回収人から廃品を買い取り、整理、品目によっては簡単な洗浄、加工を施して出荷する。通常、区画内に平屋を建てて住み込み、家族経営を行う。家族の労働力で間に合わない場合には、親戚、同村の者を手伝いに雇う。さらに、外地人を雇用することもある。これには、四川、安徽などの出身者が多いといわれる。

仲買人が扱う品目の種別は、紙類（新聞紙、ボール紙、雑誌古紙）、飲料容器類（瓶、缶、ペットボトル）、プラスチック、ゴム、ガラス、布、木材、鉄、非鉄金属（銅、アルミニウムが主）に大別される。これらの品目は、それぞれ販路が異なる。そのため、仲買人が扱う品目は一品目に特化している。主な販路は図1中にある通りである。プラスチック、非鉄金属は細目が細かく、ひとつの区画からの一品目の出荷量は少ないため、河北省にあるプラスチック、非

鉄金属の専門市場へそれぞれ出荷される。

図2、図3は、A集積場と付近の他の2つの集積場の廃品買い取り価格の変動をボール紙、ペットボトルを例に見たものである。

廃品売買の取引単位は、飲料容器では個数、それ以外の品目では重量である。それぞれの区画には重量計が備えられ、回収人が運び込んだ廃品はここで回収人、仲買人双方立ち合いのもと、計量され、総額が決まる。各品目の廃品の単価は、仲買人の工場出荷価格に利ざやを見込んだ額を元に決められ、日々変動するが、相手の回収人によって買い取り価格を変えることは普通ない。また、いくつかの集積場間で、品目ごとの単価にはほとんど差がない。

(3) 廃品回収人

廃品回収人は、自転車の後ろに畳1畳ほどの大きさの荷台をつけた荷台付き自転車、それよりも小型のリヤカー付き三輪車などで町中を周回する。前者の大型の荷台付き自転車に乗る者が多い。これは、人であれば3～4人乗せるこ

図2 ボール紙の価格変動

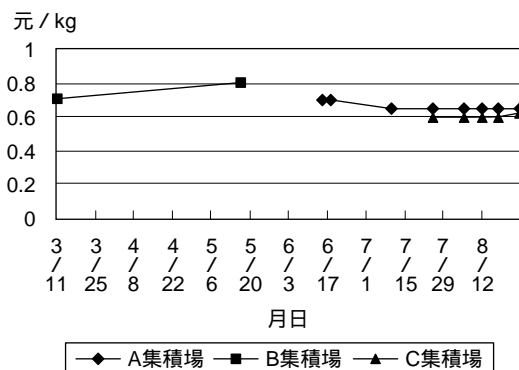
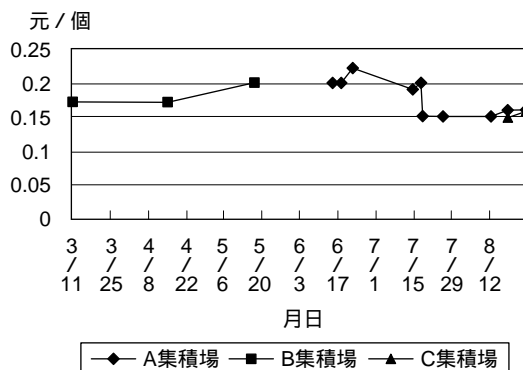


図3 ペットボトルの価格変動



(出所) 筆者作成。

(注) B集積場は5月末に再開発により閉鎖された。A集積場は2001年2月から営業していたが、6月以前の価格データは入手できなかった。C集積場は7月に営業開始した。

(出所) 筆者作成。

(注) B集積場は5月末に再開発により閉鎖された。A集積場は2001年2月から営業していたが、6月以前の価格データは入手できなかった。C集積場は7月に営業開始した。

とができ、廃品を満載すれば300キ口前後になる。後者は運搬できる廃品の量も少なく、老人や女性の回収人、廃品回収量の少ない回収人がこのタイプの三輪車を利用している。荷台付き自転車と竿秤、廃品を入れるビニール製の大袋数枚、紙類を束ねる梱包テープが回収人の商売道具である。彼らには地方出身者が都市部で就業するために必要な就業証、暫住証などの証明を受ける術がない。そのため、常に公安の目を気にしながら行動しなければならない。商売道具の荷台付き自転車は、普通中古を150～200元ほどで購入する。公安に捕まれば、すぐに取り上げられてしまうからである。竿秤は、実際よりも軽く計量する細工がされた、特殊な秤が使われており、専門の商人から100元余りで購入する。

回収人は、町中を廻り、住民や店舗、建築現場などから廃品を買い取る。買い取り価格はそれぞれの回収人が独自に定めており、人によりまちまちである。また、同じ一人の回収人でも、相手によって提示する買い取り価格は必ずしも同じではない。

集めた廃品が荷台一杯になると、回収人は付近の集積場へ荷を売りに行く。付近にあるいくつかの集積場のうち、どれに行くかは完全にそれぞれの回収人の自由である。通常、集積場ごとの買い取り価格はほとんど同じであるので、最寄りのなじみの集積場に行くが、新しく条件のいい集積場ができれば、そちらに変更することもある。良い条件とは、価格の他に、立地条件、公安の干渉などがある。

引き取り価格が同じであれば、ひとつの区画の仲買人と常に取引を重ねることで、計量の不正や不愉快を避けることができる。仲買人によ

る引き取り価格の相違が最も大きいのは、金属類である。これは、金属廃材取り扱い許可証の有無に起因する。許可証を持たない仲買人でも、実際には金属の買い取りを行う者が多い。その場合、許可証の名義借りや転売などの方法をとるため、買い取り価格は低くなる。特に、金属廃材を多く回収した場合には、回収人はしばしば、普段行かない遠くの集積場まで荷を売りに行く。こうした場合に備えて、回収人たちは仲間内で付近の集積場の買い取り価格情報を常に交換している。

回収人の仕事は、仲買人よりは収入が低い、その日の労働報酬をその日のうちに現金で手に入れることができる。そのため、廃品の価格変動によるリスクも小さい。回収人の収入は格差が大きく、平均月収が2000元以上になる者から数十元の者までいる。

出身地では、大多数が河南人で、その他河北、安徽、江蘇、四川の出身者がいるが、非河南人の回収人は老人や女性であったり、男性でも小型のリヤカー付き三輪車に乗っているなど、見るからに回収量の少ない者が多い<sup>(注26)</sup>。主要な労働力は河南人である。

## 業種内の就業構造

本節では、業種内における実質的な業務従事者である廃品仲買人と廃品回収人に着目して、それぞれのプロフィールと日常業務を見てみたい。

### 1. 廃品仲買人

#### (1) プロフィール

表3は、廃品仲買人の基本的属性を、業種内での就業年数の長い者から並べたものである。

表3 廃品仲買人の属性と就業歴

仲買人 <sup>1)</sup>	呼称(品目)	年齢	出身	学歴 <sup>2)</sup>	上京年	北京における就業経験	廃品就業 <sup>3)</sup>	参入ルート <sup>4)</sup>	仲買歴(品目)	来京以前就業経験
2	陸鉄(木材)	38	固始県蒋集镇	3	1989	農業労働(1カ月)、廃品回収人(1年)、廃品仲買(10年)	12	1	10年(紙類、鉄以外全鉄)	なし
3	万(紙)	31	固始県蒋集镇	4	1989	農業労働(1年)、廃品回収人(4年)、廃品仲買(6年)	10	3	6年(紙類)	なし
4	趙(全品目)	49	固始県城郊郷	1	1993	廃品回収人5年、2年前より仲買を兼ねる(非認可)	8	1	2年(全品目)	農閑期に木工
	鄭(全品目)	31	固始県洪埠郷		1994	荷揚げ2年、廃品回収人5年、91年より仲買を兼ねる(非認可)	5		2年半(全品目)	なし
	仁(紙)	28	固始県蒋集镇	3	1997 <sup>5)</sup>	廃品回収人(3.5年)、廃品仲買(半年)	4	3	6カ月(紙類)	なし
	王(紙)	29	固始県蒋集镇	4	1999	廃品整理手伝い(2年)、廃品仲買(半年)	3	2	半年(紙類)	なし
	張(プラスチック)	26	安徽省合肥市	4	1999	廃品回収人(2年)、廃品仲買(半年)	3	3	3カ月(ビニール)	河南でバス自営
	陸妹(飲料)	29	固始県蒋集镇		1999	廃品整理手伝い(2.5年)、廃品仲買(半年)	3	2	半年(飲料)	なし
	王(飲料)	29	固始県蒋集镇	4	1994	豚鬚餃の自営(3年)、調味料仲買(3年)、廃品仲買(1.5年)	1.5	1	1年半(飲料)	なし
	張(ビニール)	37	固始県蒋集镇	4	1997	衣服小売り(3年)、廃品加工手伝い、廃品仲買(1年)	1	2	1年(プラスチック)	なし
	王(非鉄金属)	52	固始県蒋集镇	4	1999	建築隊親方(1年)、廃品仲買(半年)	0.5	2	半年(非鉄金属)	解放軍兵士 村長

(出所) 本人へのヒアリングより筆者作成。

(注) 1) 丸数字はA集積場内の仲買人を示す。

2) 学歴は、1:小学校中退、2:小卒、3:中学校中退、4:中卒、5:高卒以上を指す。は未回答。

3) 廃品就業は、廃品回収業における就業年数を指す。

4) 廃品回収業への参入ルート。1:自分で、2:家族、親戚を頼って、3:同郷者を頼って。

5) 1991年から2年間在京し、その後帰郷して97年から再来。

表4 廃品仲買人の家族形態と同居形態

仲買人	呼称(品目)	家族形態(うち北京で同居する家族成員/故郷に残る家族成員)	家族以外の北京での同居者	北京在住親戚
2	陸鉄(木材)	一部同居(夫婦、5歳息子/15歳息子、母)	なし	なし
3	万(紙)	未婚	なし	なし
4	趙(全品目)	同居(夫婦/なし)	息子夫婦	有
	鄭(全品目)	同居(夫婦、4歳息子/なし)	なし	有
	仁(紙)	同居(夫婦、6歳娘、0歳双子/なし)	両親	有
	王(紙)	同居(夫婦/なし)	両親、妻両親	有
	張(プラスチック)	同居(夫婦/なし)	両親	有
	陸妹(飲料)	同居(夫婦/なし)	兄夫婦	有
	王(飲料)	同居(夫婦、4歳娘/なし)	兄夫婦	有
	張(ビニール)	同居(夫婦、9歳娘)	なし	無
	王(非鉄金属)	一部同居(夫婦/息子2人)	なし	有

(出所) 本人へのヒアリングより筆者作成。

(注) は無回答を示す。

20代、30代の家計の中心となる労働力が中心で、出身地は河南省固始県に集中している。特に蒋集镇出身者が多く、学歴は中卒者が最も多い。

なお、仲買人はいずれも家族経営で、通常男性が経営の中心になっている。家族形態を見ると(表4)、No.2の万以外は全員が既婚者で、ほとんどが核家族で北京で同居、つまり集積場内に起居している。例外はNo.1の陸が中学生の長男を故郷の祖母の元に残している例、No.11が同じく就学年齢の子供2人を故郷に残している2つの例のみである。自分または配偶者の親兄弟を呼び寄せ、同居して手伝いに使っている例は多く、No.3,5,6,10がそうである。No.1,4,5,9,10の家庭では就学前の子供や小学校低学年の子供<sup>注27)</sup>を同居させている。

## (2) 参入ルート

仲買人はどのような就業経験を持ち、どのように現在のポストに参入したのだろうか。表3を参照すると、インフォーマントの上京時期には1989~99年までばらつきが見られるものの、仲買人の就業歴にはいくつかのパターンがあることがわかる。

### (i) 業種内からの上昇移動

廃品回収人を一定期間経験し、その後仲買人にいわばステップアップした、No.1,2,3,4,5,7のインフォーマントがこのタイプである。業種内での就業年数の長い者はほとんどがこのタイプで、回収人として資金を蓄積し、同じ業種内でより収入の多い仲買人に上昇的に職業移動した者である。

### (ii) 区画手伝いからの独立

多く親戚の経営する区画において、一定期間手伝いや見習いとして就業し、業務を覚えた上で自ら独立した区画を経営するようになった仲

買人。No.6,8,10がこれにあたる。この場合、手伝いをしてきた区画と同じ品目で仲買を始める例が多く、また独立時には手伝い先だった親戚から資金面、情報面などの支援を受けられることもあるという。

### (iii) 他業種からの新規参入

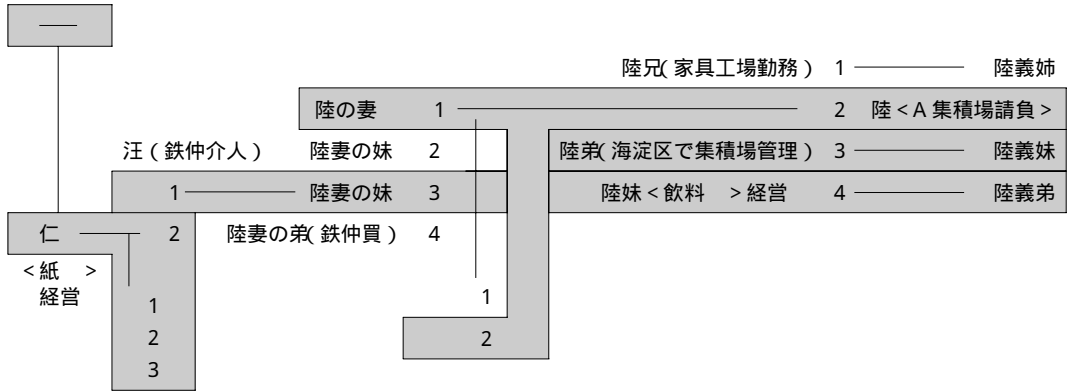
比較的新しく業種内に参入した仲買人には、廃品回収とは全く関連のない業種での就業経験を持ち、直接仲買人として業種内に参入したNo.9,11の例も見られる。この場合、他業種での就業時に仲買人を始めるのに十分な資金を貯蓄しており、また廃品回収業の業種内にノウハウを提供してくれる有力な血縁関係者がいることが条件になっている。

なお、北京に来る以前に農業以外の就業経験を持つ者が非常に少ないことは、中国の労働力移動に関してよく指摘される<sup>注28)</sup>ように彼らの持つ就業ルートの少なさを示していると考えられる。上京後の就業経験は、早期到北京に来た者では農業労働、工事現場での荷積みなど、他の肉体労働に就いた例が見られるが、比較的最近の参入者では、上京後直接廃品回収業に参入する例が多い。これとも関連するが、参入ルートとしてほとんどのインフォーマントが家族・親戚や同郷者を頼って参入した、と回答している。

最後に、仲買人の扱う廃品の品目にも注目したい。ひとつには、資金量による制約がある。廃品品目の中でも、紙類、飲料容器、ぼろ布などの品目の仲買に必要な資金量は比較的少ない。それに対して、金属類の仲買には経営許可証が必要であり、最もコストが高い反面、利益も最も上がる品目である。一定の資金が用意できるという前提の上で、もうひとつには情報提供者



図5 A集積場内の人間関係(1): 陸家を中心に



(出所) 筆者作成。

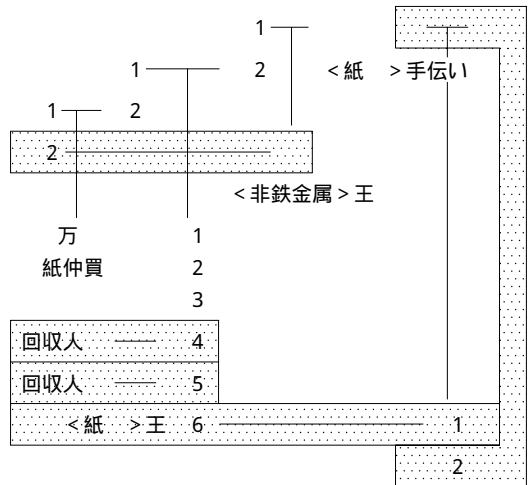
- (注) (1) は男, は女, 数字は兄弟姉妹関係を示す。  
 (2) 横線は婚姻関係, 縦線は親子関係を示す。  
 (3) 網掛けはA集積場内居住者(図4見取り図に対応)。  
 (4) 囲みは同居家族を示す。

の有無が仲買品目の決定に重要な要因となる。これについては、(4)仲買業務の中で再び取り上げる。

(3) 就業の場：集積場内の社会関係

仲買人の就業の場である集積場を、A集積場を例に見てみたい(図4)。A集積場は法人名義を持つ経営者から、河南人仲買人の陸(No.1)が全面的に管理を請け負って営まれている。区画を賃貸する仲買人の募集、賃貸料の集金など日常の管理は全て陸に任されている。区画を賃貸している仲買人を詳細に見ると、ほぼ全員が陸との何らかの直接的な関係を持っていることがわかる。集積場内の第1の社交圏は、陸と陸の妻を中心とする血縁関係者のグループである(図5)。第2の社交圏はもうひとつの血縁関係を基礎としており、陸とは同村の出身者、つまり地縁関係を持つ者が中心である(図6)。図6中の万は、彼自身はA集積場のテナント

図6 A集積場内の人間関係(2): 王家を中心に



(出所) 筆者作成。

- (注) (1) は男, は女, 数字は兄弟姉妹関係を示す。  
 (2) 横線は婚姻関係, 縦線は親子関係を示す。  
 (3) 網掛けはA集積場内居住者(図4見取り図に対応)。  
 (4) 囲みは同居家族を示す。

ではないが、陸と同村の出身でこの社交圏の者たちを陸に紹介する鍵となった人物である。

その他のテナントは、職縁関係による。陸によると、飲料 区画の王，非鉄金属区画の王，ビニール区画の張，プラスチック区画の張の4人は、北京で仕事に知り合った者である。プラスチック区画を賃貸する張は安徽省合肥市の出身，その他3人の仲買人は共に河南省固始県の出身であるが，出身村は陸と異なる。非鉄金属の王は，紙類 区画の王ら兄弟と従兄弟関係にあり，王家は第2の社交グループの中心になっている。また，ビニール区画の張は非鉄金属の王と同じ村出身の旧友同士で，王と同時にA集積場に移ってきた。

プラスチック廃材の仲買をする張家は，北京の郊外で叔父を中心にプラスチック加工工場を経営している。陸とは，叔父と陸とが業務上知り合い，比較的気があった仲だった。以前A集積場のプラスチック区画には河南人の仲買人一家が入っていたが，営業不振で出ていき，その後陸が引継に業務を行っていた際に張家の叔父と知り合い，声をかけた。

以上，場内の各仲買人世帯は，集積場の内部責任者である陸と何らかの直接的関係を持つことがわかる。それは，血縁関係，地縁関係を持つ者が中心であるが，一部業務上の職縁で知り合った者もいる。ひとつの集積場内の仲買人が，内部管理者と何らかの社会関係を持つことは，集積場内に一定のまとまりを生んでいる。

#### (4) 仲買業務

仲買人による廃品の出荷方法には，以下の3つがある。(i)工場への直接出荷，(ii)専門の仲買業者を通じた出荷，(iii)大規模経営仲買人への転売，である。

#### (i) 工場出荷

No.1の陸，No.2の万など，仲買人就業歴が長い者は通常この方法をとっている。2人の仲買人の扱い品目は異なるが，どちらも長期的に取引関係を持つ出荷先工場を持つ。

屑鉄を扱う陸の取引先には，首都製鉄所とその他いくつかの小規模な鉄工所があり，屑鉄の純度によって出荷先を決めている。小規模鉄工所は自前で精錬ができないため，純度の高い屑鉄を高値で買い取る。純度の低い鉄屑やブリキなどの屑鉄は，首都製鉄所に低価格で出荷する。陸は自家所有の2トントラックを持ち，出荷時の運搬も自ら行っている。

紙類の仲買人である万は，A集積場の紙類区画経営者の従兄である。A集積場から3～4キロ離れた太陽宮の廃品集積場内で紙類の回収区画を経営している。万は扱う紙類のうち，段ボールのみを工場への直接取引で出荷している。万の取引先の製紙工場は製紙工場の集中する河北省保定市に2～3カ所ある。工場でトラックを保有しており，古紙を引き取りに来る。出荷時は古紙をトラックに積み込み，万も工場のトラックに乗りこんで工場に同行する。工場での計量に立ち合って支払いを受けるためである。万の出荷する段ボールは，毎回20トン程で，普通2000元ほどの純利益が出る。万が回収人からの買い取りと工場出荷の間で稼ぐ利ざやが段ボール1キロにつき1角の計算になる。

#### (ii) 仲買業者

A集積場内の紙類 区画の仲買人，仁は仲買業者を通じて出荷を行っている。仁はA集積場の開設と同時に初めて仲買人になった。仲買人としての就業歴は浅く，また身内に同品目の仲買人をする有力な知り合いがない。その



ため、同郷者に紹介された仲介人を通して廃品の出荷をしている。仲介人は河北人で古紙を専門に輸送する運送会社を経営している。仁の古紙の運搬は、仲介人がトラックと運転手を派遣し、出荷先工場と連絡を取る。出荷時は仁も同乗して工場に向かい、計量、支払いを行う。仲介人への手数料は高速道路の通行料込みで1往復につき定額の550円である。1回の運搬料は7～8トンになる。

仁の古紙仲買による利ざやを仮に万と同様に1キロ当たり1角として計算すると、8トン出荷時の収入は800円である。そのうち550円を仲介料として取られるとすれば、収入はいくらも残らない。実際に仁は2001年7月時点で半年間の仲買経営によって1万元近い赤字が累積していると嘆いており、7月末には区画賃貸を止めて回収人を始めた。

A集積場内の仁の区画に平屋を建てて住む、仁の義兄（妻の兄）汪は鉄の仲介業者である。2トントラックを所有し、北京市内の通州区、河北省承德市などに4～5の取引先工場を持っており、屑鉄を専門に輸送する。運搬料を含んだ仲介料は運搬する鉄の質にもよるが、1キロ当たり1角以下、1回の積載量は4～5トンで、1往復200円ほどの稼ぎになる。汪に屑鉄の輸送を頼む仲買人は20人ほどで、同乗して工場まで行く者も、長年の信頼関係から汪に任せる者もいる。

A集積場に入入りする品目特定の仲介業者には、この他に酒瓶を専門に運搬する王がいる。汪、王とも、出荷先の工場を把握していることが自分の商売の鍵であるといい、出荷先は絶対に他人に紹介しないという<sup>(注29)</sup>。汪の場合は、同じ村出身の同業の親友から業務を学び、出荷

先も紹介を受けた。王は当初、同郷の社長の下で酒瓶運びをする労働者だったが、社長が他業種に仕事を変えたのを契機に、出荷先の工場を譲り受けた。

### (iii) 転売

集められる廃品の総量が少なく、トラック1台分に満たない仲買人は、自分の区画で買い取った廃品を大規模経営の別の仲買人に転売することが多い。また、ペットボトル、プラスチックなど再利用工業へのお荷前に加工を要する品目は、仲買人から加工業者へと廃品が転売される。

上述した紙類仲買人の万は、段ボールは工場へ直接出荷するが、新聞古紙はトラック1台分に満たないため、別の仲買人に転売している。また、A集積場内のビニール製品、ゴム製品、ぼろ布など雑多な生活廃品の区画を経営する張は、それぞれの品目ごとの回収量が少ないため、トラックを保有し、集めた廃品を別の河南人の知り合いに転売している。

仲買人の廃品出荷ルートとしては、工場へ直接出荷する(i)の方法が最も利潤が大きい。では、それに必要となる条件にはどのようなものがあるだろうか。廃品の出荷量が十分であること、その上で条件の良い出荷先工場を取引先に持っているかどうかが必要な条件となる。さらに、廃品の価格変動に関する情報をどう入手することも重要な要因である。廃品の価格は日々変動しているが、仲買人の廃品出荷サイクルは短くても1週間ほどで、その間の価格変動も日々回収人から買い取る廃品価格に反映させなければならない。つき合いの長い取引先工場を持つ仲買人は、価格が変動すれば工場が電話で知らせてくれるなどの情報入手ルートを確保している。

また、そうしたルートを持たない仲買人は仲買人仲間の中で価格変動に関する情報を交換している。市況が絶えず変化する廃品市場において、仲間との情報交換は欠かすことができない。そのため仲買人は、親戚や親しい友人に同じ品目を扱う仲買人を持っていることが多く、しばしば仲間の経営する区画へ出向いて相互に情報交換を怠らない。

## 2. 廃品回収人

### (1) プロフィール

表5は、廃品回収人32人の基本的属性を上京年の早い者から順に一覧表にしたものである。一見して、年齢層は仲買人に比べて幅広いものの、20代、30代の既婚男性労働者が中心であること、固始県出身者が圧倒的に多いこと、上京時期にも1989年から2001年の調査時点まで幅広いことが見て取れる。学歴は最高が中卒であることは仲買人と同様である。中卒者が11人で約半数である。なお、家族との同居状況(表6)は、家族成員全員が北京で同居する者、故郷に家族を残し単身で北京に滞在する者、子供や親を故郷に残して夫婦で北京に滞在する者がそれぞれ約3分の1ずつである。

### (2) 参入ルート

表5より、廃品回収業への参入ルートが先に北京に入った家族や親戚、同郷者を頼ってのチェーン移動であることは、中国の一般的な出稼ぎ労働者の移動傾向[高 2001, 191; 杜 1997, 32]と共通の特徴を示している。

就業経験に注目すると、回答のあった30人中12人が他業種での就業経験を全く持たず、故郷から直接北京の廃品回収業に参入していることがわかる。北京での他業種への就業経験を持つ者は、30人中14人で、主な業種は建築隊、工事

現場の荷積み工、自転車タクシー、バイクタクシーなどの労働強度が高く、稼ぎの少ない業種である。なお、北京と故郷以外の他の地方での就業経験を持つ者は5人と少ない。廃品回収人の多くが、技術を持たず、他の出稼ぎ先地域への就職ルートも持たない非熟練労働者であると見ることができる。

なお、回収人の収入には相当な幅がある。比較的高収入を得て、安定的に就業している回収人と、町を巡回してもほとんど収穫のない低収入層が存在している。特に、非河南人の回収人はほぼ例外なく低収入である。回答のなかった者も、小型のリヤカー付き三輪車に乗っているなど、一目で回収量が少ないことが見て取れる者が多かった。こうした差は何に起因するもののだろうか。後の第3節において再び考察したい。

### (3) 回収業務

廃品回収人の仕事は、店舗が開店準備を始める朝7時前後に始まる。得意先を持たない回収人は町を巡回し、声がかからなければ住宅地や建設現場など廃品が出やすい地点に仲間内で集まり、時間をつぶす。廃品回収人にとって、独占的に出入りできる得意先を持つか否かは、収入に大きく影響する要素である。

「定点」と呼ばれる得意先を持てるかどうかは、古参者の既得権益である場合も、新参者による戦略的獲得によるものもある。

回収人 No. 7 の趙は北京に来て8年目で、望京一帯の主要なオフィス、学校などのほとんどを得意先にする古参回収人である。大きな単位は廃品の排出量が多く、価格交渉で極端な要求をする職員も少ない。趙の得意先はほとんどが、長年のつき合いによって獲得したものだという。

表5 廃品回収入の属性と就業歴

性別	年齢	婚姻	出身地 <sup>1)</sup>	学歴 <sup>2)</sup>	上京年	月収	参入ル 一ト <sup>3)</sup>	他業種就 業経験 <sup>4)</sup>	備考
1	男	29	既	固始県蒋集镇	2	750	1	1	廃品回収3年,トラック運転4年,再び廃品回収
2	男	30	既	固始県蒋集镇	3	1,000	3	1	飲料運び2年
3	男	33	既	固始県蒋集镇	2	700	1	1	建築隊3年
4	男	27	既	固始県蒋集镇	4	800	3	0	なし
5	男	45	既	固始県李店郷	4	750	3	1	米京後,探した建築隊で1年余り
6	男	40	既	固始県李店郷	4	600	2	1	土砂積み6年
7	男	49	既	固始県城郊郷	1	1,000	3	2	故郷で農作業と木工(農閑期),2年前より仲買を兼ねる
8	男	33	既	固始県徐集镇	1	1,000	3	1	建築隊1年
9	男	33	既	固始県蒋集镇	2	500	3	0	なし
10	男	28	既	固始県李店郷	3	1,200	2	1,2	荷積み3年半,河南で建築隊2年,雑貨屋1年,バイクタクシシー2年
11	男	28	既	固始県徐集镇	4	550	3	0	なし
12	男	31	既	固始県洪埠郷	4	550	3	1	土砂積み2年,のち,廃品回収人,3年前より仲買を兼ねる
13	男	30	既	安徽省阜陽	4	550	1	0	建築,農業,仕事のないうきに廃品回収,廃品回収による収入は1日10元未満)
14	男	47	既	河北省石家庄	4	800	2	1	なし
15	男	25	既	固始県李店郷	3	600	1	0	工場2カ月,廃品回収1年,建築隊4年,バイクタクシシー
16	男	28	既	固始県蒋集镇	1	600	1	0	なし
17	男	56	既	安徽省庐江	1	600	1	0	なし
18	男	34	既	固始県蒋集镇	4	900	3	0	なし
19	男	30	既	江蘇省南通	4	550	1	2	全国各地で調理師計5年
20	男	33	既	固始県蒋集镇	4	1,000	2	0	なし
21	男	56	既	固始県李店郷	2	2,000	1	1	故郷で生産隊幹部・豆腐屋・食用油精製,北京で自転車タクシシー
22	女	37	既	固始県泉河鋪郷	4	500	2	1	市場売り子2.5年
23	女	50	既	安徽省古河	4	700	3	0	故郷で村民小組會計10年,北京で清掃工3年(廃品回収を兼ねる)
24	男	45	既	固始県蒋集镇	4	350	2	0	なし
25	女	45	既	固始県蒋集镇	3	550	2	1	自転車タクシシー
26	男	19	未	固始県李店郷	4	400	3	1,2	90年来京荷積み3カ月,帰郷,湖北池掘り3カ月,帰郷,99年より北京で廃品回収
27	男	36	既	固始県李店郷	4	1,500	2	2	安徽で水道管工事工3年,故郷派出所4年,広東で水道管工事工10年
28	男	34	既	固始県李店郷	4	1,000	2	2	安徽で電気工5年,広州で電気工2年
29	男	47	既	固始県蒋集镇	4	400	3	0	なし
30	男	33	既	固始県李店郷	4	500	0	0	なし
31	男	26	未	固始県李店郷	4	400	3	0	なし
32	男	58	既	安徽省阜陽	2001	500	0	0	なし

(出所) 本人へのヒアリングより筆者作成。

(注) は無回答を示す。

1) 河南省固始県出身者は郷鎮名まで記入した。

2) 学歴は,1:小学校中退,2:小卒,3:中学校中退,4:中卒,5:高卒以上を指す。

3) 廃品回収業への参入ルート。1:自分で,2:家族,親戚を頼って,3:同郷者を頼って。

4) 0:他業種就業経験なし,1:北京以外の地方における他業種就業経験あり,2:北京における他業種就業経験あり。詳細は備考欄に記入。

表6 回収人の家族形態と同居形態

回収人	家族形態 (うち北京で同居する家族成員/故郷に残る家族成員)	備考	北京在住 の親戚
1	同居(夫婦, 3子/なし)		有
2	単身別居(なし/妻, 2子)		無
3	単身別居(なし/妻, 9歳子(就学), 0歳子)	3人の子は北京の民工子弟学校に通う 上の子供の就学で妻と2子は今年帰省した 妻は帰省して出産, 出産後故郷に残る	有
4	単身別居(なし/妻, 3歳子)		有
5	一部同居(夫婦/2子(高,中), 母)		有
6	単身別居(なし/妻, 4歳子)	兄弟, 義父母, 義兄弟と北京で同居	有
7	同居(夫婦, 息子夫婦/なし)		有
8	一部同居(夫婦/9歳子, 両親)	弟家族(廃品回収業)と同居	有
9	単身別居(なし/妻(農業), 11歳息子, 9歳娘)		有
10	同居(妻(清掃工), 3歳娘, 妻両親, 妻弟夫婦/両親)		有
11	同居(妻, 5歳子/なし)		有
12	同居(妻, 4歳子, 両親/なし)	妻(廃品買い取り), 父引越し取り壊し業, 4歳の子は未就学 同村出身者と近くに住む。子供は故郷で就学中	有
13	単身別居(なし/妻, 子)	息子22歳(工場勤務), 娘10歳は北京で就学中(民工子弟学校)	有
14	一部同居(妻, 22歳息子, 10歳娘/20歳息子)	義弟(妻の弟)とも同居	無
15	同居(妻/なし)		有
16	単身別居(なし/妻, 4歳娘, 0歳息子)		有
17	一部同居(妻/息子)	妻(ゴミ拾い), 息子(安徽で大学在学中)	有
18	一部同居(妻/10歳, 4歳子, 両親)		有
19	(妻/)		有
20	同居(夫婦, 娘2人)	娘2人は北京で就学中(民工子弟学校)	有
21	同居(夫婦, 子/なし)		有
22	一部同居(夫婦/息子2人(高・中))		有
23	一部同居(夫婦/)		有
24	同居(妻, 息子2人)	妻は同じ職場で清掃工	有
25	一部同居(夫婦/)	姉夫婦と北京で同居	有
26	未婚(なし/両親)		有
27	一部同居(妻/小3年, 小4年の子, 母)	両親, 妹の夫, 弟と北京で同居	有
28	単身別居(なし/妻, 2子)		有
29			有
30	単身別居(なし/妻, 子)		有
31	未婚		有
32	単身別居(なし/家族全員)	両親, 兄, 義弟と北京で同居	有

(出所) 本人へのヒアリングより筆者作成。

趙の得意先のひとつである中国社会科学院研究生院のガードマンによると、学校の事務職員が趙のことを信頼しており、彼を校内に入れるよう指示している。「定点」では、回収人は他の回収人との価格競争を避けられる。実際に、趙の研究生院内での廃品買い取り価格は、他の回収人の通常の買い取り価格に比べて単位当たり2～4角も低い。なお、趙は居住先の平屋で2年前から非認可で廃品買い取りもしている（仲買人 No.3）。一般の回収人に比べてかなりの高収入を得ているものと思われる。

回収人 No.28の陳は、2001年に上京したばかりの新参者であるが、すでに5～6カ所の「定点」を持つ。一部は同じ地域で回収人をする父親（No.21）から譲り受けたものであるが、中には戦略的に獲得したものもある。中国社会科学院研究生院に隣接する留学生宿舍は数年来趙の得意先であったが、陳がこれに取って代わった。また、陳は竣工間際のビル建設現場を新たに得意先として獲得している。建設現場は廃品の排出量が多く、1人の回収人では引き取った廃品を運びきれないことが多い。そのため、家族や同村出身者のグループで待機し、協力して回収する例が多い。陳の作戦は、どちらの場合も獲得初期はほとんど儲けを見込まない廃品価格の高い設定と、現場の出入りと廃品管理のキーパーソンへの接近、関係維持であった。こうしたノウハウを、陳は同業の父親から学んでいる。

以上、「定点」の獲得を巡る回収人の日常からは、得意先の有無に関しては古参者に一定の優位性があること、その上で新参者にも競争による得意先獲得のチャンスは開かれていることが確認された。とはいえ、廃品価格が低迷して

いる近年では、廃品回収はそれほど利益の大きい仕事ではなく、リスクをとってまで回収する例は少ない。

さて、回収人にも同業者に仲間を持つことのメリットが観察できる。得意先を持たない新参者でも、古参の回収人から得意先を譲り受け、ノウハウを学ぶ、建設現場などの大規模な廃品排出スポットをグループで得意先にする、などはどれも同業の仲間を通して得られるメリットである。ここに、高収入の回収人と低収入の回収人が分化する構造が存在していると考えられる。また、「定点」の獲得や建設現場囲い込みには、当然のことながら複数の回収人間での競争が繰り広げられる。そうした際に、河南人間では一定のルールが存在し、正当な競争が行われる。正当な手段によって獲得したのである限り、他者や他のグループの「定点」には手を出さないことが暗黙の了解になっている。相手が河南人でない場合には、仲間を集めて暴力に訴えるなどの手段も用いるという<sup>(注30)</sup>。

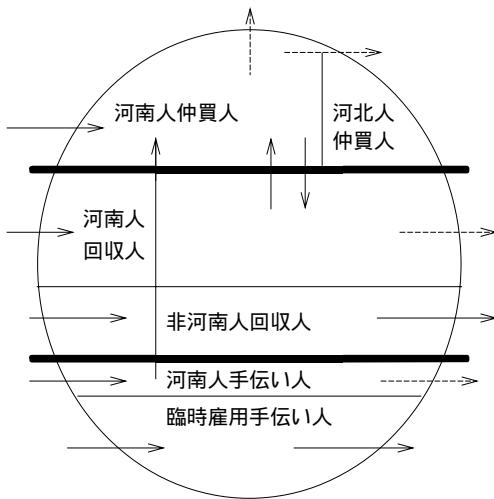
## 独占労働市場の形成要因

本節では、これまでの議論をふまえて本稿の課題であった都市部における特定の地方出身労働者による業種内労働市場の独占要因を考察する。まず、廃品回収業の構造をまとめ、その要因を考察する。その上で「浙江村」研究を参照して他業種の構造との比較を試みる。

### 1. 廃品回収業における労働市場の独占

北京市の廃品回収業を巡る業種内分業構造と就業者の流動性を図7に図示してみたい。なお、業種内分業構造は収入の多寡によって階層的に理解することとする。

図7 廃品回収業を巡る就業者の流動性



(出所) 筆者作成。

(注) 実線矢印は流動性があること，破線矢印は流動性が一般に見られないことを示す。

業種内の分業構造は，収入の多い順に仲買人，回収人，区画手伝いである。それぞれの分業階層の中で，河南人が大多数を占め，また同一分業階層内でも河南人が非河南人に比べて優位な位置を占めている。区画手伝いでは，河南人の手伝い人は仲買人の家族や親戚であり，数年後に仲買人として独立する者が多い。それに対して，非河南人の手伝い人は臨時雇いに過ぎず，業種内での職業階層移動は見られない。回収人階層では，非河南人回収人が有利な地位を占めていないことは，インフォーマントからの収入に関するヒアリング，廃品の運搬手段である三輪車の積載可能量から推測される。インフォーマントの仲買人からのヒアリングでも，非河南人の回収人は参入してきても業種内での就業期間は短く，流動性が非常に高いことが確認された。なお，仲買人層に関しては，河南人の参入以前から仲買人の位置を占めていた河北人が現

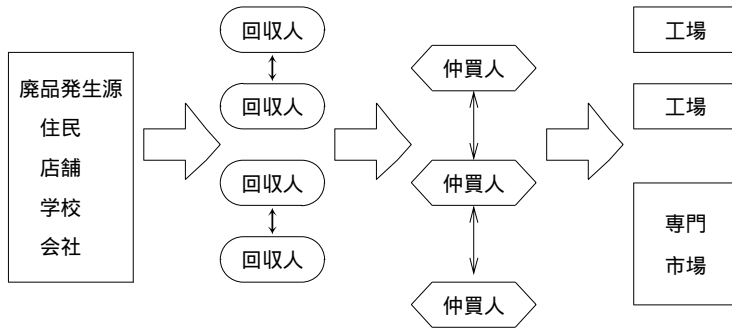
在も一部業種内に残っている<sup>(注31)</sup>。しかし総じて，業種全体にとって新しく参入してくる非河南人就業者は臨時的な存在に過ぎない。

では，こうした業種内労働市場の河南人による独占状態は実際にどのようにして形成されているのであろうか。それは，業種内で必要とされる資源が，河南人ネットワークの中に保持されるからだと考えられる。ここでの資源とは，具体的には就業の基盤と情報へのアクセスである。また，同郷者の間に共有される一定のルールが，それを強化していると考えられる。

仲買人はまず廃品集積場の区画を賃貸しなければならないが，北京市内の大多数である個人営集積場では，河南人管理者が経営を請け負い，個人的なネットワークの中から区画の賃貸者を探す。その結果，業種内に知り合いの多い河南人仲買人にとっては賃貸区画へのアクセスが容易で，非河南人にとっては困難となる。社会関係を共有することは，仲買人にとっては就業の場であり，同時に生活の場でもある集積場内に一定の秩序をもたらす。また，価格変動，出荷先工場などの業務上不可欠な情報は，同業の仲間内でやりとりされているため，業種内に情報提供者がいれば新規参入も可能である。ただし，業種内で成功した仲買人でも他業種への転職は非常に困難である。

回収人では，廃品集荷の得意先が就業の基盤にあたる。上述したように，回収人にとって好条件の学校や店舗・オフィス等は通常，すでに古参者によって占められている。古参回収人は帰郷などの場合も仲間内に得意先を預けたり，譲るなどするため，条件の良い単位は常に河南人ネットワークの中に保持される。また，回収

図8 廃品回収業における業種内主体間関係



(出所) 筆者作成。

(注) 太矢印は廃品売買に伴う取引関係。細矢印は互助・協力関係。

人間でも、集積場ごとの廃品買い取り価格に関する情報交換や、業務上の若干のノウハウ伝授、協力や助け合いが見られる。こうした面で、やはり河南人の業種内における優位性が存在する。さらに、ひとつの「定点」や建設現場を巡って、複数の回収人や回収人グループ間で囲い込み競争になりがちな回収人層では、同郷者の間のみ存在する、最低限のルールもまた重要な公共財である<sup>(注32)</sup>。

最後に、当初の仮説に立ち返ってまとめておきたい。北京の廃品回収業は、その参入障壁の低さにもかかわらず、社会関係を持たない新参者にとっては内部での安定的な就業が極めて困難な労働市場となっている。それは、業種内の資源が古参者を中心とする河南人によってほぼ独占されているためである。しかしながら、河南人ネットワークは包括的、固定的なものではないため、河南人同士の競争は激しく、依然として非常に競争的な市場である。

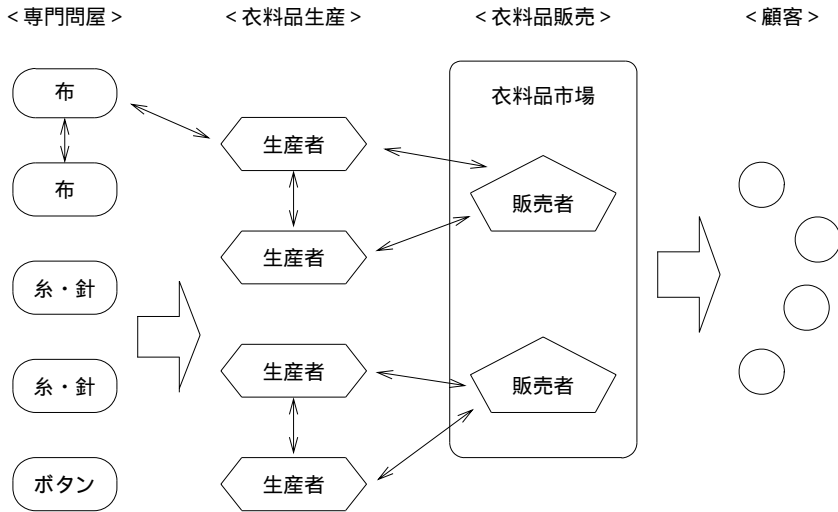
## 2. インフォーマルセクターの業種間分断

以上、考察してきた廃品回収業の業種内労働市場の様相は、中国の都市インフォーマルセク

ターの中でどの程度普遍的なのだろうか。本節では、業種内の主体関係に着目してまず廃品回収業を考察し、その上で「浙江村」の衣料品産業との比較を試みる。なお、「浙江村」の事例は中国のインフォーマルセクター研究としては最も既存研究が多く[王 1995; 項 2000]<sup>(注33)</sup>、他方で多くの点で廃品回収業とは異なる性質を持つ<sup>(注34)</sup>。2つの業種を比較分析してみると、両者の相違点、共通点を明らかにしたい。

廃品回収業の業種内主体間関係は図8のように考えられる。業種内で観察される主体間関係は大きく2種類に分けられる。つまり、廃品の流れに沿って発生する取引関係と、同一分業階層内での互助・協力関係である。取引上の関係には、最低限の信頼関係が必要であるものの、基本的には利害関係である。廃品回収業においては、この関係は不特定な主体間にも発生しうる。つまり、必ずしも河南人である必要はない。それに対して、特徴的なのは同じ分業階層に属する仲間同士での互助・協力関係である。この関係は一般に、血縁、出身地における地縁関係を基盤としており、この関係が廃品回収業にお

図9 「浙江村」衣料品市場内の主体間関係



(出所) 王(1995, 106-148)を参照して、筆者作成。

(注) 太矢印は一般の取引関係、細矢印は互助・協力関係を示す。

ける参入障壁の原因になっていると考えられる。  
次に、衣料品産業を見てみよう。

北京市豊台区の「浙江村」は10万人近い浙江省温州地区出身者を抱え、住人の半数以上が「浙江村」の主要産業である衣料品生産に従事している。「村」内には、この基幹産業を中心に、衣料品販売業、糸・針、布、ボタン、ファスナーなどの専門問屋、端切れ回収業等の関連業種、その他生活全般に関連するいくつものサービス産業が形成されている。業種内の主体間関係に着目して整理すると、図9のようになる。

「浙江村」に特徴的なのは、業種内主体の社会関係ネットワークが分業構造のタテ、ヨコの双方向に張り巡らされ、それを十分に活用して経営を行っている点である。

まず、製品の流れに沿って発生する主体間関係から見てみよう。「浙江村」内の最も中心的

な業種は家族経営で営まれる衣料品生産業である。生産者は「浙江村」内の専門問屋から必要な材料を購入し、製品に仕立てて市場内に店舗を構える販売者に出荷する。王春光の先行研究によれば、衣料品生産にとって最も重要な資源は製品のデザインに関する情報であり、それを最も直接的に把握できるのは製品販売者である。そのため、衣料品生産者 販売者間の協力関係が重要になり、両者は常に密接に連絡を取り合い、情報を伝達して収益向上に努める。この両者の関係は、(1)同一人物である場合、(2)同一家計内の家族である場合、(3)親兄弟である場合、(4)同じ出身村の近隣者である場合がある。いずれも、経済上の関係から独立の社会関係が存在する。その他、生産者 専門問屋間では、血縁・地縁関係など何らかの社会関係があれば代金の短期的な付け払いが行われている。要する



に、製品の流れに沿って発生する取引関係においても、互助・協力行為が取られているのである。そして、その背後には社会関係が存在している。

同じ分業構造内に属する同業者間での関係は、協力・互惠関係である。生産者同士では、親しい仲間内でのみ、受注した製品の生産応援、デザイン情報の交換が行われる。他人にはこれらの情報をもらさないよう、注意が払われる。また、専門問屋同士の仲間関係では、原料の共同買い付けによる仕入れコストダウン等が行われている。

最後に、河南人による廃品ビジネスと「浙江村」の衣料品ビジネスとを比較して考察したい。社会関係ネットワークに注目すると、廃品ビジネスでは分業構造横断的な同業者間でのみ社会関係ネットワークが機能しており、廃品の流れに沿って発生する分業構造縦断的な取引の場では社会関係が利用されていなかった。それに対して、衣料品ビジネスでは分業構造横断的、縦断的の双方で社会関係ネットワークが存在し、機能している。

分業構造横断的な同業者間の社会関係ネットワークの機能は2つの業種間で一致している。利害の共有と相互信頼を基礎とした互助・協力関係である。相違点は、分業体制縦断的な主体間関係にある。「浙江村」では商品の流れに沿った異なる業種の主体間を繋ぐ社会関係が存在し、利用されているのに対し、河南人の廃品ビジネスではそれが見られない。その原因は、扱う商品の性質と業種内の主体間関係によるものと思われる。商品の性質としては、売買時に情報の共有がしにくい商品であればあるほど、取引には信用のおける相手を探す必要がある。ま

た、それが扱いに一定の技術が必要とされる商品、供給者または需要者を独占的に把握できる商品であれば、そうした取引関係が何らかのグループ、あるいはネットワーク内に保持されやすい。取引に必要な、信用を保証するシステムとして利用されているのが、血縁・地縁関係であると見ることができる。

そのため、「浙江村」の衣料品ビジネスは廃品回収業以上に部外者の参入の難しい、独占的業種となっている。「浙江村」内業種への参入の難しさは、就業に必要とされる技術や資金の有無によるだけではなく、信頼関係の基礎となる社会関係にある点では、廃品回収業と共通する特徴を持っている。

## む す び

本稿では、北京市の廃品回収業を題材に、インフォーマルセクターにおける地方出身者の就業構造を議論した。とりわけ、今日の中国で見られる、都市インフォーマルセクターのいくつかの業種が、特定地域出身者によって独占される要因を明らかにしようとした。

中国の廃品回収業は、かつて計画経済の下に独占的に経営されてきた。この時代がもたらした副産物で現在も業種内に残るものは、ひとつには資源配分あるいは所有の問題、もうひとつは流通経路の空白である。前者は未だに計画経済体制内に留め置かれており、実際には集積場経営権、金属廃材取扱許可証などの形で集団所有企業が独占的に所有している。後者は廃品の流通経路のみならず関連情報の流通経路の空白をも含む。業種内の河南人は、持ち前の血縁・地縁ネットワークを存分に活用してこれらの空

白を補完していると見ることができる。また、「浙江村」の先行研究からは血縁・地縁ネットワークを産業の特性に合わせてさらに広範に、有効に活用しているのが「浙江村」における衣料品関連産業であることを指摘した。

ただし、こうした社会関係ネットワークが同時に他地域出身者にとっての参入障壁ともなっており、就業者の業種間での職業移動は難しいのが現状である。温州モデル発祥の地である温州地区出身者による「浙江村」の繁栄と、「村」民の経済的成功は注目に値するが、その先に社会移動の可能性はあるのだろうか。本稿における廃品回収業の業種内就業構造の議論から考えると、その可能性には悲観的にならざるを得ない。つまり、本稿で見たように業種内における社会関係を資源として就業が実現している場合、就業者は一旦その業種を離れると自らの優位性を失う。情報や資源の流通が不十分な業種では、社会移動も極めて難しいと思われる。社会移動という観点から、今後中国の労働力移動に注目し続ける必要がある。

最後に、今後に残された課題としては、歴史的、地域的双方の比較研究の必要性が挙げられる。前者としては、中国社会をより長期的スパンで捉えれば近代中国におけるギルド研究がなされており、そうした研究をも視野に入れた理解が求められる。後者に関しては、主に開発経済学の分野で、発展途上国の市場構造に関する研究がなされている<sup>(注35)</sup>。ただ、地域的な比較研究を行うには中国のインフォーマルセクター研究は未だ不十分であり、今後、業種的にも、地域的にも広めて進めていく必要がある。

(注1) 本稿においては、各々の経済主体が「生活の糧を得るために行う全ての活動」という意味で「就業」の語を用いたい。つまり狭義の「就業」に加え、経済活動を支える社会関係などの要素も含めて議論の対象とする。

(注2) 社会移動とは、社会の構造を階層的に理解し、その階層間での個人や集団の社会的地位の移動を指す。社会的地位は主に職業を指標として測られる。中国に関する階層研究はまだ始まったばかりであり、殊に地域間移動を伴う出稼ぎ労働者の階層移動に関しては研究蓄積は皆無である。そこで、本稿では労働移動性に着目することで社会移動研究の基礎としたい。なお、中国の階層研究としては、園田(2001)を参照されたい。

(注3) 中国の人口移動にまつわる戸籍管理制度について、詳細は前田(1993)、蔡(2001)に詳しい。

(注4) 「中華人民共和国戸口登記条例」(1958年1月9日)。

(注5) 「国务院関与農民進入集鎮落戸問題的通知」(1984年10月13日)。

(注6) 「公安部関与城鎮暫住人口管理的暫行規定」(1985年7月13日)。

(注7) 開発経済学においてインフォーマルセクターの定義は、労働立法に守られておらず、雇用が不安定な低所得部門を指す。具体的には中小企業の雇用者、日雇い労務者、小商人や職人などを含む[速水 1995, 188]。中国の都市部インフォーマルセクターの定義については、石原の整理がある。それによると、中国の都市インフォーマルセクターは行商、日雇い労務者、フォーマルセクター(国有企業、集団所有制企業)における臨時工、家事雑務などが挙げられる[石原 1991, 28]。本稿中で中国のインフォーマルセクターとして言及する際にも石原の整理に依拠する。

(注8) このことは、特に北京において際だっている。北京においてインフォーマルセクターに就業する地方出身者が多い原因としては、南方の沿海地域に比べ外資企業、郷鎮企業の工場などでの就業機会が少なく、一方で人口規模の大きい北京では、住民へのサービス産業が多く地方出身者に就業の場を提供していることが指摘できる[時 1992, 18]。

(注9) 農村出身者の都市における就業実態に具体的に着目した研究としては彭(1996)による社会関係資本に着目した建設業のケーススタディー、唐・馮(2000)による「河南村」廃品回収業従事者の階層分化に関する研究があるが、いずれも業種内労働市場の就業構造を明らかにしようとする筆者の問題関心に十分に答えるものではない。

(注10) 「浙江村」研究では王(1995)、項(2000)が社会学的な視点から詳細なフィールドワークを行っている。

(注11) ここで「河南村」という呼称は、一帯に廃品回収業に従事する河南人が集中するため、北京政府関係者や付近の北京住民が使う呼称である。「破爛村」(ゴミ村)とも称される。ところで、廃品回収業に携わる河南人の集住するこのような「村」は、対象地域に限らず北京市内の至る所に存在すると考えるべきである。廃品の発生源は市内の至る所であり、そのため就業者も市内のあらゆる地点に分散している。この意味で、作業場兼居住地が一カ所に集積する「浙江村」と「河南村」の性質は異なる。そのため、筆者は「河南村」の呼称を用いない。

(注12) 中西(1991)は都市インフォーマルセクターに関する開発経済学の主要な理論を展望し、自身のフィールド調査を踏まえて都市インフォーマル部門を実体的に理解するための新たな理論モデルを構築している。本稿が参照する参入障壁と労働移動性に関する議論は、中西(1991)の提示するいくつかの重要な論点の中のひとつに過ぎない。

(注13) この調査は1997年11月1日に北京市全域において、北京市に1日以上滞在する北京戸籍を持たない人口を対象としたものである。なお、このセンサス資料では外来人口の北京における職業を13種に分類し、その他の属性とのクロス集計を行っている。なお、職業の13区分の内訳は、専門技術者、国家・党・企業事業単位責任者、事務員、商業従事者、廃品回収業従事者、レストラン・サービス業従事者、修理サービス業従事者、その他サービス業従事者、農林水産業従事者、工業従事者、建設業労働者、運送業労働者、その他分類不能者である。

(注14) 2000年12月27日付け『生活時報』によれ

ば、1998年、北京で廃品回収業に就業する地方出身者総数は8万2000人。また、北京の廃品回収業の変遷に詳しい北京市再生資源管理弁公室の富鴻鈞主任によれば、8万人とも10万人ともいわれるとのことであった(2001年7月9日、同弁公室における筆者による聞き取り)。

(注15) これは、基本的には北京で合法的に登録されている地方出身者のみを対象にするというセンサスデータの性格による限界である。筆者の調査において、合法的な廃品集積場内に住む仲買人は暫住手続きを取っていたが、回収人では暫住証取得者は皆無であった。よって、センサスデータは主に、合法的な廃品集積場内で登記された就業者を概ね捕捉した数値であると考えられる。ここには、後述する仲買人層と一部手伝い人層が含まれる。

(注16) 北京市の地方出身者総数に占める省別構成では、河北省が最大で24.9%、河南省が第2で13.5%であることを考慮すると、この2省出身者の廃品回収業就業者全体に占める割合が相当高いこと、殊に河南省出身者は突出していることが確認できる。

(注17) 文中の固有名詞および人名には、適宜仮名を用いる。

(注18) 北京市では、大規模な廃品集積場の立地を住民の居住空間、運送上の利便性などを考慮して四環路から五環路の間に限定している[北京市商業委員会他2001]。四環路内の廃品集積場は、そのため近年次々に閉鎖、移転させられている。

(注19) この回収人は、筆者が滞在していた中国社会科学院研究生院留学生宿舎に独占的に出入りしていた者で、筆者は宿舎のガードマンを通して知り合い、調査への協力を得ることができた。

(注20) 供銷合作社は、全国の流通、消費、商工業に関わる共同組合事業を統一、主導する組織。

(注21) 中国において「物資」とは、計画的に配分される原材料、機械設備のこと[天児ほか1999, 1094]で、物資部門はその「物資」を全国に配分するための中央政府の一部門である。

(注22) 中国再生資源管理弁公室富主任からのヒアリング(2001年7月9日、中国再生資源管理弁公室にて)および『当代中国』叢書編集部(1990, 480)よ

り。

(注23) 中興廃旧物資回収公司姚家園市場における中興公司崔総経理、同市場内の北京市朝陽区再生資源協会田春蘭主任からのヒアリング(2001年7月13日)。中興回収公司是1998年に旧来の国営廃品回収公司から独立した集団所有企業で、現在北京市内に6カ所の大型廃品集積場を経営している(<http://www.zxhs.com>)。

(注24) 固始県労働就業管理所殷主任からのヒアリング(2001年7月30日、同管理所にて)。

(注25) 業種内では北京人の名目上の経営者を「大老板」(老板はだんな、主人、社長の意味の日常語)、実質的に集積場を請け負う河南人管理者を「二老板」と呼んでいる。数人の業種内事情に詳しいインフォーマントからいくつかの個人営集積場について、全てこの構図が確認できた。

(注26) 廃品回収人とは別に「ゴミ拾い」と呼ばれる者がいる。彼らは、路上やゴミ箱からペットボトルや瓶缶、段ボールや新聞の切れ端を拾い集めて廃品集積場へ運び、現金に変える。移動手段は徒歩や自転車、小型三輪車で、ほとんど資金がかからない。しかし一方で、彼らによって回収される廃品は数量がごわずかで、これだけで生計をたてるには不十分である。ゴミ拾いには、四川省、安徽省出身の老人や女性が多いといわれ、また廃品回収人をする夫と共に北京に暮らす河南人女性もいる。本稿中では、ゴミ拾いの人々は廃品回収人とは区別し、考察の対象としない。

(注27) 学齢の子供が北京にいる場合、A集積場内では全ての子供が集積場の向かいにある森林小学校に通学していた。これは、戸籍の関係から北京の公立校に通いにくい地方出身者の子供を対象とした民間の非公式な学校である。「民工子弟学校」、「民工学校」などと呼ばれるこれらの学校については、山口(2000)、阿古(2001)を参照。

(注28) 中国の地域間労働力移動においては、労働市場や職業紹介機関が未整備であるため、知人を頼ってのチェーン移動が75%余りを占める。職業紹介所や政府主導の紹介ルート、企業の公募など公的なルートを通しての就業者はわずか13.6%である[趙1997, 32]。

(注29) 彼らが自らの廃品出荷先を絶対に他人には

紹介しないということと、彼ら自身参入時には第三者による出荷先の紹介を受けて業務が可能になったこととは一見矛盾するかのよう考えられる。これは、よほど親しい、あるいは利害の一致した仲間でない限りは、紹介しないと理解すべきである。なお、この背景には近年の廃品価格低迷による業種内の不景気も影響していると思われる。

(注30) インフォーマントの陳(回収人 No. 28)によると、彼の巡回エリアのある街区には、毎週決まった曜日に軽トラックで来て廃品を回収していく回収人がいる。この回収人は、自ら紙類の区画を営し、仲買をしているため、一般の回収人より高い単価で古紙を買い取る。このような「不公正な」商売をする回収人は、もし彼が河南人でなかったら、他の回収人に暴力的に追い出されることになり、商売を続けられなかったであろうという。しかし実際には彼は河南人なので、皆手を出さない。

(注31) 仲買人層では、当初優勢だった河北人が、後に業種内でどのような位置を占めるようになったのかは興味深い点であるが、今回十分な調査ができなかった。河北人仲買人の割合は、それぞれの集積場ごとに異なるとされる。例えば、個人営の小規模集積場であれば、実質上の経営者(前述の「二老板」)によって仲買人の属性はほぼ決まってくるはずである。そうした社会関係要素に影響されないと思われる公営の大規模集積場については、未だ比較的多くの河北人が残っていることも予想される。朝陽区姚家園にある公営の大規模集積場、中興公司姚家園物資回収市場では、全75の仲買人への賃貸区画のうち、13区画の仲買人が河北人、安徽人2人、福建人2人、山東人1人、残る57区画が河南人仲買人による(2003年1月11日、中興公司姚家園市場にて行った筆者による同市場管理人劉宇氏からのヒアリング)。なお、中興公司市場に隣接する、同じく集団所有制企業による大規模市場、利源興達商貿中心保綠源市場では、全79区画中、河北人仲買人の区画が57.8%を占め、河南人仲買人の20.3%を上回っている。他に、天津人仲買人18.8%、安徽人3.1%の内訳であった(2001年5月16日、保綠源市場にて行った西野真由氏による同市場管理人呼氏からのヒアリング)。なお、保綠源市場は1998年に開業して

おり、集団所有制企業の経営する廃品集積場としては最も初期に開設されたものである。中興公司姚家園市場での河北人仲買人からのヒアリングによると、河北人は金属廃材の仲買を行う者が多く、またかつての区画経営で、工場と仲買人の間を仲介する仲介業者になった者が多いとのことであった（2003年1月11日、中興公司姚家園市場にて行った筆者による河北省出身仲買人からのヒアリング）。金属廃材の仲買は、廃品品目の中でも利幅が最も大きく、人気の高い品目である。つまり、河北人は単純に河南人によって仲買人の立場を奪われ、淘汰されたのではなく、業種内のより有利な立場を保持していると考えられることでもある。

（注32）同郷者間に働くこうした原則については、広州の「散工」と呼ばれる雑多な肉体労働を請け負う日雇い労働者を研究した周（1994）にも言及がある。同業者間での関係として、同郷出身者同士には正当な競争を尊重し、過当競争を避ける原則が働いている。一方、同郷者でなければ、腕力に訴える、他人の商売を妨害するなどの行為がしばしば見られる。出身地ごとのなわばりが発生するのもこれが原因である。なお、廃品回収業において暴力団の存在が指摘されることがあるが、筆者の調査の範囲では仲買人、回収人の日常業務の中では暴力団やなわばりの存在は確認されなかった。それにもかかわらず、河南人によってこの業種の主要な業務が占められていることは、この同郷ルールである程度説明できると考える。

（注33）本節中の「浙江村」に関する記述は、これらを参照した。

（注34）「浙江村」の特殊性は、彼らの故郷である温州の特殊性に由来する面が大きい。これに関しては第2節第2項において既述した。これに関連して、「浙江村」をコミュニティとして捉えると、その凝集性の高さは他の地方出身者集住地域には類を見ないのである。さらに、産業としての衣料品産業は、ある程度資金や技術を必要とするものと考えられ、この点でも廃品回収業とは異なっている。

（注35）この分野の研究としては、本稿で参照した中西（1991）の他、佐藤（2002）にはクリフォード・ギアツのバザール経済論を参照枠組みとしつつ、中国農村の定期市を、商人の経営行為の分析を通して構造

的に考察する興味深い研究がある。

## 文献リスト

### 日本語文献

- 阿古智子 2001. 「中国における出稼ぎ労働者子弟の教育問題」『東亜』(9)(9月): 70-87.
- 天児慧ほか 1999. 『岩波現代中国事典』岩波書店.
- 石原享一 1991. 「中国経済構造の多重化」石原享一編『中国経済の多重構造』アジア経済研究所 11-51.
- 園田茂人 2001. 『現代中国の階層変動』中央大学出版部.
- 中西徹 1991. 『スラムの経済学 フィリピンにおける都市インフォーマル部門』東京大学出版会.
- 佐藤宏 2002. 「雲南農村における市場と商人」中兼和津次編著『中国農村経済と社会の変動 雲南省石林県のケース・スタディ』御茶の水書房 259-287.
- 速水佑次郎 1995. 『開発経済学』創文社.
- 前田比呂子 1993. 「中華人民共和国における『戸口』管理制度と人口移動」『アジア経済』34(2)(2月): 22-41.
- 山口真美 2000. 「『民工子弟学校』 上海における『民工』子女教育問題」『中国研究月報』54(9)(9月): 1-17.
- 李天国 1995. 『北京の新疆村 イスラム系コミュニティの生成過程』ハーベスト社.

### 中国語文献

- 北京零点調査公司 1997. 「裸人 北京流民の組織化状況研究」北京零点調査公司編『観察中国』中国工商出版社 201-220.
- 北京市商業委員会他 2001. 「北京市商業委員会等九部門印発関与促進と規範北京市社区再生資源回収体系建設的实施方案的通知」(京商發(交)[2001]30号).
- 北京市外来人口普查弁公室 1998. 『1997北京市外来人口普查資料』中国商業出版社.
- 蔡昉 2001. 『中国人口流動方式与途径 1990~1999年』社会科学文献出版社.
- 『当代中国』叢書編集部 1990. 『当代中国的供銷合作事業』中国社会科学出版社.
- 杜鷹 1997. 「從就業和流動看勞働力市場」杜鷹・白南生

- 『走出鄉村 中國農村勞動力流動實証研究』  
經濟科學出版社 107-126.
- 高嘉陵 2001. 「人口遷移流動與社會網路分析」蔡昉『中國人口流動方式與途徑 1990~1999年』社會科學文獻出版社 178-216.
- 國務院 1963. 「國務院批轉國家計畫委員會, 國家經濟委員會等部關於改進廢金屬回收管理工作的報告的通知」, 「廢舊有色金屬回收管理暫行辦法」(同通知添付), 「廢舊鋼鐵回收管理暫行辦法」(同左).
- 彭慶恩 1996. 「關係資本和地位獲得——以北京市建築行業農民包工頭的個案為例」『社會學研究』64(4)(7月): 53-63.
- 商業部・公安部・國家工商行政管理局 1985. 「關於城鄉個體商業經營廢舊物資的暫行規定」的通知. 『生活時報』2000. 12月27日.
- 時憲民 1992. 「北京市個體戶的發展歷程及類別分化」『中國社會科學』77(5)(9月): 19-38.
- 孫征 2001. 「流動人口的生存方式」蔡昉『中國人口流動方式與途徑 1990~1999年』社會科學文獻出版社 275-319.
- 唐燦・馮小雙 2000. 「『河南村』流動農民的分化」『社會學研究』88(4)(7月): 72-85.
- 王春光 1995. 『社會流動和社會重構——京城「浙江村」研究』浙江人民出版社.
- 項飈 2000. 『跨越邊界的社區——北京「浙江村」的生活史』生活・讀書・新知三聯書店.
- 原勞働部農村勞働力就業與流動研究課題組 1999. 『中國農村勞働力就業與流動研究報告』中國勞働出版社.
- 張仁壽・李紅 1990. 『溫州模式研究』中國社會科學出版社.
- 趙樹凱 1997. 『縱橫城鄉——農民流動的觀察與研究』中國農業出版社.
- 中國供銷合作總社史料叢書編集室 1988. 『中國供銷合作社史料叢書供銷合作社大事記與發展概況』中國財政經濟出版社.
- 周大鳴 1994. 「廣州『外來散工』的調查與分析」『社會學研究』52(4)(7月): 47-55.

[付記] 本稿の投稿過程において、2名の匿名レフェリーによる多くの重要かつ詳細にわたるご指摘をいただきました。この場をかりて、感謝申し上げます。

(東京大学大学院総合文化研究科博士課程)